

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	都市の荒廃を描く文学：鮑照「蕪城賦」をめぐって
Author(s)	佐藤, 大志
Citation	中國中世文學研究, 63-64 : 20 - 35
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051447">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051447</a>
Right	
Relation	



# 都市の荒廃を描く文学―鮑照「蕪城賦」をめぐって―

佐藤大志

## 一 問題の所在

鮑照の「蕪城賦」は、かつて南北の要衝として栄えた都市が、見る影もなく荒廃してしまふ、そのありさまを描いた賦である。都市の荒廃を描く文学、そのようなジャンルがもしあるとすれば、鮑照の「蕪城賦」はまさにそのような文学に位置づけられる作品の一つであろう。

では、「蕪城賦」以前の詩文において、都市の荒廃はどのように描かれ、そこに人は何を見ようとしてきたのだろうか。そして、そのような都市の荒廃を描く文学のなかに、「蕪城賦」を位置づけた場合、そこには何が見えてくるのだろうか。

都市の荒廃を描く文学の系譜に、鮑照の「蕪城賦」を位置づけて論じようとすることは、既に土屋聡氏が試みられている。氏は鮑照以前の廢墟や遺跡を描いた漢魏以来の文学作品は、滅亡の原因に対する批判と反省に主眼が置かれていること、これに対して蕪城賦は滅亡の原因、その責任の所在についても言及しないことを指摘し、それが彼のパトロンだった劉義慶が宋王室から向けられた

責任問題の追及を回避するための世俗的政治的発言であったと指摘する<sup>1)</sup>。

また近年では、西山ゆみ氏が五言詩及び紀行賦との比較を通して、蕪城賦に描かれる廢墟は「墓場」と「辺境」のイメージを合わせ持ち、そこは「無人」の非文明の世界であり、また未知の廢墟であるが故に、廢墟は事細かに描写され、記憶の片鱗が回想されるのだと指摘する。

小稿では、この両氏の指摘を参考としつつ、中国古代の人々が、都市の荒廃をどのように描き、そこに何をしようとしてきたのかということを見よう。そして次に、「蕪城賦」が都市の荒廃をどのように描いているのかを明らかにし、従前の文学と比較しつつ、「蕪城賦」が都市の荒廃を通して、何を描こうとしていることについて考えてみたい。

## 二 都市の荒廃を描く文学の系譜

### ―「治世」と「天命」…二つの系譜

「蕪城賦」以前の都市の荒廃を描く文学を読むと、そこには二つの系譜があることに気づかされる。一つは都

市の荒廢に過去や現世の政治的問題を見出すものであり、もう一つは興亡の無常や天命の転変を見出すものである。前者の例として、まず最初に挙げられるのは、『詩経』王風の「黍離」である。

『詩経』王風「黍離」

彼黍離離 彼稷之苗 彼の黍 離離たり 彼の稷の苗  
行邁靡靡 中心摇摇 行き邁くこと 靡靡たり 中心  
摇摇たり

知我者 謂我心憂 我を知る者は 我を心憂うと謂う  
不知我者 謂我何求 我を知らざる者は、我を何をか  
求むと謂う

悠悠蒼天 此何人哉 悠悠たる蒼天 此れ何人ぞや

詩序は、この詩を周の大夫が旧都鎬京を訪れた時、その宗廟宮室が荒れ果てているのを見て、王室の顛覆を傷んで作つたものと言う。この旅の途中に荒廢した旧都を訪れた人物が、その荒廢した姿を見て、かつての王室を回顧するという構図は、次の『史記』宋微子世家が語る「麦秀歌」をめぐるエピソードにも見える。

『史記』宋微子世家

於是武王乃封箕子於朝鮮而不臣也。其後箕子朝周、過故殷虛、感宮室毀壞、生禾黍。箕子傷之、欲哭則不可、欲泣為其近婦人。乃作麦秀之詩以歌詠之。其詩曰、「麦秀漸

漸兮、禾黍油油。彼狡僮兮、不与我好兮。」所謂狡童者、紂也。殷民聞之、皆為流涕。（是に於いて武王乃ち箕子を朝鮮に封じて臣とせず。其の後箕子は周に朝し、故の殷虛に過ぎり、宮室の毀壞せられ、禾黍を生ずるに感ず。箕子 之を傷み、哭せんと欲するも則ち可ならず、泣かんと欲するも其れ婦人に近しと為す。乃ち麦秀の詩を作りて以て之を歌詠す。其の詩に曰わく、「麦秀 漸漸たり、禾黍 油油たり。彼の狡僮、我と好からず」と。謂う所の狡童は、紂なり。殷の民 之を聞き、皆 為に流涕す。）

殷の遺臣箕子は、朝鮮から周都に向かう途中に、殷の旧都を訪れ、その宮室が破壊されて荒廢するありさまを見て悲傷し、「麦秀歌」を歌う。彼の歌う「麦秀歌」には「彼狡僮兮、不与我好兮」とあり、『史記』は「狡僮」を紂王を指すと解す。この解釈に拠れば、この歌は亡国の君を回顧し、その政治を批判していると読める。

このように「黍離」と「麦秀歌」をめぐるエピソードは、旅する人が荒廢した旧都の姿を見て、滅びた王室や君主を回顧するという構造を共有している。そして、この構造は、次の班彪「北征賦」のような漢代の紀行の賦にも見出すことができる。

班彪「北征賦」は、王莽の新政権崩壊後、班彪が難を避けて長安から出発して、西の涼州に行く途中、安定郡に至った時に作つた賦とされ、冒頭部分の都長安の荒廢から始まり、末尾には辺境の荒廢した姿が描かれている。

まず冒頭部分を掲げる。

班彪「北征賦」(『文選』卷九)

余遭世之顛覆兮、罹填塞之厄災。旧室滅以丘墟兮、曾不得乎少留。遂奮袂以北征兮、超絕迹而遠遊。朝発軻於長都兮、夕宿瓠谷之玄宮。歷雲門而反顧、望通天之崇崇。乘陵崗以登降、息郇郃之邑鄉。慕公劉之遺德、及行革之不傷。彼何生之優渥、独罹此百殃。故時會之變化兮、非天命之靡常。(余世の顛覆するに遭い、填塞の厄災に罹る。旧室滅びて以て丘墟たり、曾て少しも留まるを得ず。遂に袂を奮いて以て北に征き、超として迹を絶ちて遠く遊ぶ。朝に軻を長都に発し、夕に瓠谷の玄宮に宿る。雲門を歴て反顧し、通天の崇崇たるを望む。陵崗に乘りて以て登降し、郇郃の邑郷に息う。公劉の遺徳を慕い、行革の傷つけざるに及ぶ。彼れ何ぞ生の優渥にして、独り此の百殃に罹る。故に時會の變化にして、天命の常靡きに非ず。)

「北征賦」の冒頭は、王朝顛覆の災難に遭い、廢墟となつた長安の旧宅には留まることができずに、北に行くことを決意するところから始まる。長安を出発した作者は、公劉の修めた郇郃の村で公劉の遺徳を慕い、現在人々が多く of の患を抱えている原因について、「故時會之變化兮、非天命之靡常」と述べる。李善の解釈によれば、「時會」の變化とは、時の君主が徳を修めることができ

なかつたことであり、憂患の原因は天命の無常ではなく、君主の不徳にある。これはこの「北征賦」を貫く主題のようであり、それは賦の末尾、辺境の荒廢を描く箇所にうかがえる。

躋高平而周覽、望山谷之嵯峨。野蕭條以莽蕩、迴千里而無家。風森發以漂遙兮、谷水灌以揚波。飛雲霧之杳杳、涉積雪之皚皚。雁邕邕以群翔兮、鷓鴣鳴以嘒嘒。遊子悲其故鄉、心愴愴以傷懷。撫長劍而慨息、泣漣落而霑衣。攬余涕以於邑兮、哀生民之多故。夫何陰暄之不陽兮、嗟久失其平度。諒時運之所為兮、永伊鬱其誰愬。(高平に躋りて周く覽、山谷の嵯峨たるを望む。野は蕭條として以て莽蕩たり、千里に迴かにして家無し。風森發りて以て漂遙たり、谷水灌ぎて以て波を揚ぐ。雲霧の杳杳たるを飛ばし、積雪の皚皚たるを渉る。雁は邕邕として以て群翔し、鷓鴣は鳴きて以て嘒嘒たり。遊子 其の故郷を悲しみ、心愴愴として以て傷み懷う。長劍を撫して慨息し、泣漣落して衣を霑す。余が涕を攬りて以て於邑し、生民の故多きを哀しむ。夫れ何ぞ陰暄の陽かならざる、嗟久しく其の平度を失う。諒に時運の為す所、永く伊鬱すれど其れ誰にか愬えん。)

伊藤正文氏「所謂「紀行」の賦について―「遂初賦」「北征賦」をめぐる―」(『小尾博士古稀記念中國學論集』汲古書院・一九八三)は、この辺境の風景描写は、従来

の漢賦では乏しかったが、以後その要素が増加する抒情的成分であり、文学の抒情化を開く端緒の一つであると言ひ、ここには彼がとらえた心象風景の表白があると指摘する。末尾の「諒時運之所為兮、永伊鬱其誰愬」には、如何ともし難い時の運りに対する感慨が述べられており、ここは、後述する都市の荒廢を描く文学のもう一つの系譜である、都市の荒廢に興亡の無常や天命の天変という問題を見る例とすることもできる。

しかし、この辺境の風景描写の直前には、蒙恬の長城建設が堅く防御することに専心したことを批判し、それに対して、前漢の文帝は、謙讓の徳を以つて匈奴との融和を図り、辺境に平和をもたらしたことを想起してその治政を讃えている。この蒙恬の批判と文帝の賞賛を承けて、引用部分では、長城付近の荒廢した現在のありさまを描き、民の苦難を思い、久しく和平の訪れぬ世を嘆いている。それは冒頭で公劉の遺徳が偲ばれていたのと同じように、謙讓の徳を以て辺境政策に望んだ文帝の時代と対比されることよつて増幅する嘆きである。このように直前部分との関連を考慮すれば、「諒時運之所為兮、永伊鬱其誰愬」の「時運」は冒頭の「时会」と呼応し、為政者が徳を修めなかつたが故の結果であるという思いを含み得るであろう。

この「北征賦」の後半に描かれる荒廢は、都市の荒廢ではなく、辺境の荒廢であるが、都市の荒廢を目撃して、過去の為政者の「徳」や「名」を懐うことは、次の班昭

「東征賦」に見える。

班昭「東征賦」(『文選』卷九)

睹蒲城之丘墟兮、生荆棘之榛榛。惕覺寤而顧問兮、想子路之威神。衛人嘉其勇義兮、訖于今而称云。蘧氏在城之東南兮、民亦尚其丘墳。唯令徳為不朽兮、身既沒而名存。(蒲城の丘墟を睹るに、荆棘の榛榛たるを生ず。惕として覺寤して顧み問ひ、子路の威神を想う。衛人其の勇義を嘉し、今に訖るまで称すと云う。蘧氏は城の東南に在り、民亦た其の丘墳を尚ぶ。唯だ令徳は不朽を為し、身既に没するも名存す。)

「東征賦」は、班昭が息子の赴任に従つて洛陽を出発して陳留に向かう時の作であり、都市の荒廢した姿を描く引用部分は、賦の末尾、かつて子路が治めたという衛の蒲城を訪れた箇所に見える。「睹蒲城之丘墟兮、生荆棘之榛榛」と、蒲城の荒廢した姿を描いた後、かつてここを治めた子路を想起し、衛の人が今も子路の勇義を讃えていることが述べられる。更に衛の名大夫であつた蘧伯玉の墳墓を訪れ、衛の民が今も彼を慕っていることを述べて、「唯令徳為不朽兮、身既沒而名存」とすぐれた徳というものは不朽であり、その身が滅んでもその名は残ることを言う。

このように漢代の紀行の賦には、旅の途中に目睹した、辺境や宮城の荒廢した姿を描いて、為政者の「徳」や「名」

という問題を語るといふ構図を見出すことができる。

この構図は、魏晉以降の紀行の詩賦にも見ることができ、例えば、王粲「從軍詩五首」其五では、曹操の故郷である譙郡に向かう途中の荒廢した土地のありさまを描き、それとは対照的に曹操の故郷である譙郡が平和で安定しており、それが曹操の徳によるものであると云う。また「七哀詩二首」其一では、戦乱のために荒廢した長安を去るときに子を棄てる婦人を目撃し、彼女を捨てて走り去った後、詩人は霸陵の岸に登って長安を望み、文帝の治政を思慕する。その他にも、西晉の潘岳「西征賦」では、長安の宮殿の荒廢した姿が描き出される部分に、漢王朝の盛時に多くの名臣や文人たちが思い起こされて、「皆清風を上烈に揚げ、令聞を垂れんとして已まず。珮声の遺響を想うに、鏗鏘の耳に在るが若し」と、彼らの遺風や令聞はいまも残っていることを述べる。更にその後には、王音・王鳳・弘恭・石頭らの外戚や宦官が、一時の勢いを得て栄えたとしても、その死の日には既にその価値は無いに等しくなると言い、不徳の人物たちを批判して結ばれている。

これらの作品に示されるように、漢魏晉の紀行の詩賦には、辺境の荒廢や都市の荒廢を為政者の「徳」や「名」の問題を見出し、それを回顧、批判するという構造を見出すことができ、これを都市の荒廢を描く文学の一つの系譜と想定することができそうである。

そしてこの系譜とは別に、もう一つの系譜として、宮

殿や都市の荒廢を描いて、興亡の無常や天命の転変という問題を語る作品群がある。例えば、『桓譚新論』に引かれる雍門周と孟嘗君とのエピソードなどがこれに当たる。

『桓譚新論』(『三國志』蜀書・郤正伝裴松之注所引)

雍門周曰、「……天道不常盛、寒暑更進退、千秋万歳之後、宗廟必不血食。高台既已傾、曲池又已平、墳墓生荆棘、狐狸穴其中、游兒牧豎躪其足而歌其上曰、孟嘗君之尊貴、亦猶若是乎。」(雍門周曰わく、「……天道は常には盛んならず、寒暑とも更も進退し、千秋万歳の後、宗廟必ず血食せざらん。高台また既已に傾き、曲池又已に平かにして、墳墓 荆棘を生じ、狐狸其の中に穴し、游兒牧豎 其の足を躪躪して其の上に歌いて曰わく、孟嘗君の尊貴、亦た猶お是の若きか」と。)

右の引用は、琴の名手である雍門周が琴の演奏によつて、現在富貴を極める孟嘗君の心を揺るがそうとする場面であり、ここで雍門周は、孟嘗君の死後にその楼閣や園池も喪失し、墳墓も無惨に荒れ果ててゆくさまを描き出すのだが、その荒廢のありさまを描く前に「天道不常盛、寒暑更進退、千秋万歳之後、宗廟必不血食」とある。これは荒廢の原因を、天道の無常と時の推移に求めるものであり、班彪「北征賦」が荒廢の原因を天命の無常ではなく、時の為政者の問題に求めるのとは対照的である。

この他にも、阮籍の「大人先生伝」では、薪を取る者

が時を待つ思想を表明する部分に、繁栄を誇つた秦があつというまに荒廃してしまつたことを見れば、「窮達」は知ることはできないと述べ、また左思「魏都賦」では、後漢末の反乱によつて各国の都市が荒廃した原因を、「時に運は陽九に距り、漢網 維を絶つ」と、天運が災厄にあたり、漢の大綱が断ち切れてしまつたことに求めている。これらもまた、天命の無常が都市の荒廃の前提となつてゐる。

また詩では、次の陸機「門有車馬客行」などがこの系譜に位置づけられる。

陸機「門有車馬客行」(『文選』卷二十八)

借問邦族間

側愴論存亡

親友多零落

旧齒皆彫喪

市朝互遷易

城闕或丘荒

墳壠日月多

松柏鬱芒芒

天道信崇替

人生安得長

慷慨惟平生

俛仰独悲傷

借問す 邦族の間

側愴として 存亡を論ず

親友は多く零落し

旧齒は皆彫喪せり

市朝は互に遷易し

城闕は或いは丘荒たり

墳壠 日に月に多く

松柏 鬱として芒芒たり

天道は信に崇替あり

人生のみ安んぞ長きを得ん

慷慨して平生を惟い

俛仰して独り悲傷す

この作品は故郷を離れて暮らす人物のもとに、故郷から客が訪れ、その客に故郷の近況を聞くという設定の樂府詩であり、引用部分は、詩の後半部分、故郷から訪れた客に故郷の推移するさまを聞いて、主人が思いを述べた部分である。故郷では知人の多くはこの世に無く、城市も変化し、墓や墓標の木々が日々増え茂っていく。その故郷の推移変化するありさまを聞き、主人は「天道信崇替人生安得長」と天道の交代と人の一生の短さを嘆く。

この他にも顔延之「北使洛」では、旧都洛陽に使いつて、彼の地の荒廃した姿を見て、「在昔 期運を輟め、繼始に聖賢を闊しくせり」と、旧都の荒廃の原因を「期運」すなわち晋王朝の命運が尽きてしまつたことに求め、同じく顔延之の「還至梁城作」では、洛陽からの帰途に魏の梁城の荒廃した姿を見て、雍門周と孟嘗君との逸話を踏まえて、「彼の雍門子の、孟嘗君に吁嗟するを惟う。愚賤共に埋滅し、尊貴も誰か独り聞こえん」と、愚賤も尊貴もついに滅び行くものであることを言う。

以上のように、都市の荒廃を描く文学には、都市や土地の荒廃を描くことによつて、「徳」の不在・「名」の不朽を問題とする場合と、運命の無常や時の推移を問題とする場合の二つの系譜があることが確認できる。そして、この二つの系譜の双方を並べて用いる例が、次の謝靈運の「選征賦」である。

謝靈運「選征賦」(『宋書』謝靈運伝)

訊落星之饗旅、索旧棲於吳余。迹階阨而不見、橫榛卉以荒除。彼生成之樂辰、亦猶今之在余。慨齊吟於爽鳩、悲唐歌於山樞。(落星の饗旅を訊ね、旧棲を吳余に索む。階阨を迹ぬるも見えず、榛卉を荒除に横にす。彼の生成の樂辰は、亦た猶お今の余に在るがごとし。齊吟を爽鳩に慨き、唐歌を山樞に悲しむ。)

右の引用は、落星に吳の遺跡を訪ねて、その荒廃したありさまを描いた部分であり、末尾の「慨齊吟於爽鳩、悲唐歌於山樞」には、典故を踏まえつつ感慨が述べられている。「爽鳩」は『春秋』昭公二十年の「左伝」を踏まえ、晏子が齊の景侯に、「爽鳩氏」以下の古人の死、乃ち昔の人の樂しみが消えた後に、現在の樂しみがあることを述べたという故事を踏まえて、「死」は必然であり、全ては「滅びゆくこと」を言う。また「山樞」は、『詩経』唐風「山有樞」を踏まえる。詩序に拠れば、これは晋の昭公をそしった詩であり、国を統治する能力がなく、国が滅亡することに気づかないことを批判したという故事を踏まえて、吳の君主が暗君であったことを言う。前者は運命の無常や時の推移を問題とし、後者は為政者の不徳を問題としており、ここでは、ここまで述べてきた二つの系譜が共に用いられていることが分かるであろう。

では、このような二つの系譜に対して、「蕪城賦」は都市の荒廃をどのように描こうとしているのだろうか。

### 三 「蕪城賦」が描こうとすること

「蕪城賦」は、城が堅固に構築されていく過程を描いた前半と、その城が無残にも崩壊した後半とに大きく分けることができる。まずかつての広陵城の繁栄を描く前半部分から見えてゆきたい。

鮑照「蕪城賦」(『文選』卷十一)【前半】

瀾池平原、南馳蒼梧漲海、北走紫塞雁門。施以漕渠、軸以崑崗。重江複閔之隩、四会五達之莊。(瀾池たる平原、南のかた蒼梧・漲海に馳せ、北のかた紫塞・雁門に走る。施くに漕渠を以てし、軸するに崑崗を以てす。重江複閔の隩、四会五達の莊あり。)

【広陵地域の地勢・交通】

当昔全盛之時、車挂轄、人駕肩。塵閉撲地、歌吹沸天。孽貨塩田、鍤利銅山。才力雄富、土馬精妍。(昔の全盛の時に当たりて、車は轄を掛け、人は肩に駕る。塵閉地を撲ち、歌吹天に沸く。貨を塩田に孽くし、利を銅山に鍤る。才力は雄富にして、土馬は精妍なり。)

【土地の繁栄】

故能夔秦法、佚周令、画崇墉、剝瀆血、凶脩世以休命。(故に能く秦法より夔り、周令に佚ぎ、崇墉を画し、瀆血を剝り、世を脩くして以て休命ならんことを図る。)

【城郭の建造と永続の願い】

是以板築雉堞之殷、井幹烽櫓之勤。格高五嶽、表広三墳。嶂若断岸、矗似長雲。製磁石以禦衝、糊頰壤以飛文。觀



基局之固護、將万祀而一君。(是を以て板築雉堞の殷、井幹烽櫓の勤あり。格は五嶽よりも高く、表りは三墳よりも広し。嶂として断岸の若く、轟として長雲に似たり。磁石を製して以て衝を禦ぎ、頽壤を糊して以て文を飛ばす。基局の固護を観るに、將に万祀にして一君ならんとす。)

【堅固な城郭と永統の願い】  
出入三代五百余載、竟瓜剖而豆分。(三代に出入すること五百余載、竟に瓜のごとく剖け豆のごとく分かる。)

#### 【城郭の崩壞】

前半は、まずこの地域の地勢の優位と交通の要所としてのありさまが描かれ、次に人々が集まり、豊富な産物を得てこの土地が反映する姿が描かれる。そして、このような土地の繁栄を得て、堅固な城郭が建造される。それは天命を得てこの繁栄が永続することを願つての行為であり、さらにその城郭が如何に堅固に築きあげられたかが描かれた後、再びそれが永続を願つて作られたことが述べられる。

このように前半はこの地に城郭が建造されてゆく過程が描かれているのだが、この前段の構成は、「西都賦」や「西京賦」など、漢代の京都賦の冒頭の構成を踏まえているようである。例えば、班固「西都賦」の冒頭部分は、次のような構成となっている。紙幅の都合上、ここでは書き下し文のみを掲げる。

#### 班固「西都賦」(『文選』卷一)

漢の西都は、雍州に在り、寔を長安と曰う。左は函谷二崑の阻に拠り、表するに太華終南の山を以てし、右は褒斜隴首の險に界し、帯ぶるに洪河涇渭の川を以てし、衆流の隈、汎は其の西に湧く。華美的毛は、則ち九州の上腴、防禦の阻は、則と天地の隩区なり。

#### 【堅固な地勢・肥沃な土地】

是の故に六合に横被し、三たび帝畿と成り、周以て龍のごとく興り、秦以て虎視す。大漢の命を受けて之に都するに至るに及びて、仰ぎては東井の精を悟り、河図の靈に協う。奉春は策を建て、留侯は演成し、天人合応して、以て皇明を發す。乃ち眷て西顧し、寔に惟れ京を作れり。

#### 【漢都制定の歴史】

是に於いて秦嶺を睇み、北阜を眺、澧灃を挾んで、龍首に拠る。皇基を億載に図り、度宏に規りて大いに起こる。

#### 【永統の願い】

高より肇めて平に終わり、世飾りを増して以て麗を崇し、十二の延祚を歴。故に秦を窮め修を極む。金城にして万雉なるを建て、周池を呀くして淵を成し、三條の広路を披きて、十二の通門を立つ。

#### 【城郭の建造】

内には則ち街衢洞達し、閭閻且に千ならんとす。九市場を開いて、貨別れ隴分かれ、人は顧みるを得ず、車は旋るを得ず。城に闐ち郭に溢れて、旁く百塵に流る。紅塵は四に合して、煙雲に相連なる。是に於いて既に庶にして且つ富み、娛樂すること疆無く、都人士女は、五方に

殊異にして、遊士は公侯に擬し、列肆は姬姜よりも侈る。郷曲の豪華、遊俠の雄、節は原嘗を慕い、名は春陵に垂ぎ、交を連ね衆を合わせて、其の中に騁驚す。

### 【城内の繁榮】

この「西都賦」冒頭の構成要素と、「蕪城賦」のそれを比較すれば、「蕪城賦」が「西都賦」の構成要素を踏まえていることが分かるであろう。しかし、「蕪城賦」と「西都賦」の構成は異なるところもある。まず「蕪城賦」には「漢都制定の歴史」に当たる部分がない。また「西都賦」は「城郭の建造」の後に、「城内の繁榮」が描かれているが、「蕪城賦」は「城内の繁榮」の後に「城郭の建造」が始まっている。

「西都賦」は、長安の堅固な地勢と肥沃な土地に始まり、「及至大漢受命而都之也」以下に漢が天命を受けたことで都城の建設が始まり、天文や緯書に従い、また奉春君の尊敬、留侯の張良の献策もあって天人が合一して都を長安に定め、その永続の願いを以て、城郭が建設されたとある。

これに対して、「蕪城賦」は地勢や交通の優位さから、人が集まり、塩や銅などの産物もあったことから、人材や財力が豊かになり、軍馬も強くなったことで、堅固な都城の建造が企図されたとされている。

この「西都賦」と「蕪城賦」の相違を考えるのに、参考となるのが、陸機の「弁亡論」である。

陸機「弁亡論」下（『文選』卷五十三）

易曰、「湯武革命、順乎天。」玄曰、「乱不極則治不形。」言帝王之因天時也。古人有言曰、「天時不如地利」易曰、「王侯設險、以守其国。」言为国之恃險也。又曰、「地利不如人和」「在德不在險」言守險之由人也。呉之興也、参而由焉、孫卿所謂合其参者也。及其亡也、恃險而已。又孫卿所謂舍其参者也。（易に曰わく、「湯武は命を革めて、天に順う」と。玄曰わく、「乱極まらざれば則ち治は形れず。」帝王の天の時に因るを言うなり。古人に言う有りて曰わく、「天の時は地の利に如かず」と。易に曰わく、「王侯 險を設けて、以て其の国を守る。」と。国を為むるの險を恃むを言うなり。又曰わく、「地の利は人の和に如かず」「徳に在りて險に在らず」と。險を守るの人に由るを言うなり。呉の興るや、参にして由る。孫卿の謂う所の其の参を合する者なり。其の亡ぶに及んでは、險を恃むのみ。又孫卿の謂う所の其の参を舍つる者なり。）

陸機「弁亡論」では、古人のこゝばを引用しつつ、国が興るためには、天の時、地の利、人の和が必要であることを言い、呉が興ったときには、この三者が合致していたのに対して、その滅ぶ時は「險」のみ、すなわち地の利のみを恃んだのだという。

ここで「弁亡論」の言う天の時、地の利、人の和の三者をもとに、「西都賦」「蕪城賦」の都城建造の過程を説

明すれば、「西都賦」の長安は、地の利、天の時によつて都城が建造され、それが人の和を形成するのに對して、「蕪城賦」の城は、地の利があり、そこに人の和が形成され、その後、都城が建造されて、天の時を願うという順序になつていゝと言へるのであらう。そしてそれは、「蕪城賦」が「凶脩世以休命」と言い、また「觀基局之固護、将万祀而一君」と、都城を堅固に建造することによつて、天の時を得て、その永続を願うことを繰り返し述べることに表れていゝ。

このように「蕪城賦」は「西都賦」の構成要素を踏まえるものの、その順序は異なつており、地の利、人の和から天の時へと、「西都賦」とは異なる径路をたどつて、都城の建設の過程を描こうとしている。そして、この天の時を願つて建造された城郭が、「瓜のごとく剖けて豆のごとく分か」れて崩壊してしまふのである。

#### 鮑照「蕪城賦」【後半】

沢葵依井、荒葛冒塗。壇羅虺蜮、階闢麇鼯。木魅山鬼、野鼠城狐。風嗥雨嘯、昏見晨趨。飢鷹厲吻、寒鴟嚇雛。伏虺藏虎、乳血狼膺。(沢葵 井に依り、荒葛 塗に胃か。壇には虺蜮を羅ね、階には麇鼯を闢わしむ。木魅山鬼、野鼠城狐あり。風に嗥え雨に嘯き、昏に見え晨に趨る。飢鷹は吻を厲ぎ、寒鴟は雛に赫す。伏虺藏虎、血を乳にし膺を喰らう。)

#### 【城内の荒廢】

崩榛塞路、崢嶸古廬。白楊早落、塞草前衰。稜稜霜氣、

軟軟風威。孤蓬自振、驚砂坐飛。灌莽杳而無際、叢薄紛其相依。通池既已夷、峻隅又已頽。直視千里外、唯見起黃埃。凝思寂聽、心傷已摧。(崩榛 路に塞がり、崢嶸たる古廬あり。白楊早く落ちて、塞草前に衰う。稜稜たる霜氣、軟軟たる風威あり。孤蓬自ら振るゝ、驚砂坐るゝに飛ぶ。灌莽杳として際まり無く、叢薄紛として其れ相依る。通池は既に夷らぎ、峻隅も又已に頽る。千里の外を直視すれば、唯だ黃埃を起こすを見る。思いを凝らして寂かに聴き、心傷みて已に摧く。)

#### 【城外の寂寞】

若夫藻局黼帳、歌堂舞閣之基、璇淵碧樹、七林釣渚之館、吳蔡齊秦之聲、魚龍爵馬之玩、皆薰歊燼滅、光沈響絕。(若し夫れ藻局黼帳、歌堂舞閣の基、璇淵碧樹、七林釣渚の館、吳蔡齊秦の聲、魚龍爵馬の玩、皆薰り歊き燼滅え、光沈み響き絶ゆ。)

#### 【往時の宮殿の繁榮と喪失】

東都妙姬、南国麗人。蕙心紈質、玉貌絳脣。莫不埋魂幽石、委骨窮塵。豈憶同輿之愉樂、離宮之苦辛哉。(東都の妙姬、南国の麗人。蕙心紈質、玉貌絳脣、魂を幽石に埋め、骨を窮塵に委ねざるは莫し。豈に同輿の愉樂、離宮の苦辛を憶わんや。)

#### 【宮女の死】

天道如何、吞恨者多。抽琴命操、為蕪城之歌。(天道如何ぞ、恨を吞む者多し。琴を抽きて操を命じ、蕪城の歌を為す。)

#### 【天道に対する恨み】

歌曰、辺風急兮城上寒、井逕滅兮丘隴殘。千齡兮万代、共尽兮何言。(歌に曰わく、辺風急にして城上寒し、井逕滅びて丘隴殘る。千齡万代、共に尽きて何をか言わん。)

## 【蕪城の歌】

「蕪城賦」後半は、まず「沢葵依井、荒葛冒塗。壇羅  
 虺、階闕麇麇」と井戸や道路が使用されることもなく  
 不通となつてゐること、建物の内部に動物たちが侵入し  
 ていることに始まる。更に「木魅山鬼、野鼠城狐。風嘯  
 雨嘯、昏見晨趨」と、本来山の奥に棲まう木魅や山鬼、  
 野鼠や城狐が風雨に吠え嘯くような、まるで山奥にいる  
 ような状況であることを描き、「飢厲厲吻、寒鴟嚇雛。伏  
 虺藏虎、乳血飡膚」と、飢えた鷹やこころえる鴟、どう猛  
 な虎までもが獲物がないために飢えに苦しむことを描く。

「蕪城賦」以前の都市の荒廢は、類型的な表現を用い  
 て描かれることが多かったが、「蕪城賦」はそのような  
 類型的な表現を用いずに、城内の荒廢を描いており、そ  
 こには人間の存在が全く消し去られ、その生活が完全に  
 喪失されてしまったことが表現されていく。

続いて、「蕪城賦」は城外の荒廢を描く。まず「崩榛塞  
 路、崢嶸古廬」と、道路が塞がれて不通となつてゐるこ  
 と、そして「白楊早落、塞草前衰」と、墳墓や辺塞を想  
 起させる植物が衰落するさまを描くことによつて過酷な  
 環境が表現される。続けて「稜稜霜氣、藪藪風威。孤蓬  
 自振、驚砂坐飛。」と、厳しい冬、孤独を想起させる景物が  
 描かれ、「灌莽杳而無際、叢薄紛其相依」と、広漠たる荒  
 野のありさまが描かれる。そして「通池既已夷、峻隅又  
 已頽。直視千里外、唯見起黃埃」と、運河や城壁が失わ

れて、辺境化した風景が描かれた後に、「凝思寂聽、心傷  
 已摧」と全てが喪失してしまつた悲しみが述べられてい  
 る。

この城外の荒廢は、班彪「北征賦」や王粲「從軍詩」  
 が描く辺境又は郊外の荒廢を描く部分と類似しており、  
 ここで「蕪城賦」は広陵城の城外が全てを喪失し、辺境  
 と化してしまつてゐることを表現しようとしてゐるよう  
 である。

さらにこれに続けて「蕪城賦」は往時の宮殿の華やか  
 さを描き、それが喪失してしまつたことを、香りがつき、  
 火が消え、光も音も絶えてしまつたと、嗅覚・視覚・聴  
 覚を意識させつつ、その喪失を描く。そしてその後、「東  
 都妙姫、南国麗人」とそこに侍つていた宮女たちが想起  
 される。

これまでの都市の荒廢を描く文字において、荒廢から  
 想起される人物を確認すると、「北征賦」では苦難多き  
 民が、「東征賦」では蒲城を治めた子路が、「七哀詩」で  
 は漢の文帝が、「西征賦」では漢の大臣や將軍たち、そ  
 して文人や史家たちなどが、それぞれ想起されてゐた。  
 ここで想起されるのは、往時の為政者や政治を担つた人  
 物が多い。また「北征賦」が悪政に苦しめられる「民」  
 を想起するのは、悪政を行う為政者への批判からであり、  
 「西征賦」が司馬相如や王褒ら文人たちを想起するのは、  
 漢の宮中で活躍した様々な人物を列挙するからである。  
 故にこれらも為政者や政治の場としての宮中を想起する

ものと考えてよいであろう。

これに対して、「蕪城賦」で想起されるのは後宮の美女たちである。この女性たちも為政者たちに侍るものと考えれば、ここでも為政者が想起されていると考えることも可能かもしれない。しかし、「蕪城賦」では、宮女たちの香り草のような心、白絹のような肌、玉のような顔、紅い唇をもっていた彼女たちの魂が石に埋もれ、その骨が塵に紛れると、その魂や肉体が喪失したことをつづさに描こうとする。このような描写から考えれば、「蕪城賦」は彼女たちの存在そのものにまなざしを向けようとしていると言えるであろう。

そして、「蕪城賦」は彼女たちの魂や肉体の喪失を述べた後、「豈憶同輿之愉楽、離宮之苦辛哉」と、彼女たちの思いも空しくなってしまったことが述べられる。「同輿の愉楽」とは君主に寵愛される楽しみであり、「離宮之苦辛」は君主の寵愛を失った苦しみである。君主をめぐる彼女たちの楽しみや苦しみ、またその思いのために行われる営為も、いまや失われてしまったのである。

「蕪城賦」以前の都市の荒廃を描く文学は、都市や辺境の荒廃を描くことによつて、「徳」の不在・「名」の不朽を問題とし、また運命の無常や時の推移を問題としていた。これらはいずれも「治世」や「天命」という中心に対して、それに翻弄される人間という周縁者の悲哀が述べられていると言いうことができるだろう。「天道如何、吞恨者多」と言う「蕪城賦」も、中心に翻弄される周縁

者の悲哀を述べるという点では変わるところはない。しかし、「蕪城賦」が従前のものと異なるのは、周縁者の悲哀を述べるだけでなく、中心に翻弄される周縁者の営為と意思をつづさに描き出そうとすることに<sup>2)</sup>ある。

そして、この中心に翻弄される周縁者の営為と意思をつづさに描き出そうとする姿勢は、前半の都城建造を語る部分にもうかがうことができる。この地は地勢に恵まれ、人も産物も豊かであるが故に、人はそこに堅固な城郭を建造することによつて、「天の時」という中心を求め、永続の願いを込めた。この「天の時」という中心をめぐる営為と意思の歴史、そして、それが崩壊し、荒廃し、ついには喪失する過程が、「蕪城賦」が描きだそうとした出来事である。そして、それを象徴的に示すのが「宮女の死」だったのではなからうか。

#### 四 むすび — 「賦」という文体の選択

ここまで、都市の荒廃を描く文学の系譜に「蕪城賦」を位置づけながら、「蕪城賦」が都市の荒廃を通して描こうとしたことについて考えてきた。端的に言えば、中心に翻弄される周縁者の営為と意思が形成され喪失する過程をつづさに描き出すこと、それが「蕪城賦」が、従前の都市の荒廃を描く文学とは大きく異なるところであろう。では、なぜ「蕪城賦」は中心に翻弄される周縁者の営為と意思を、つづさに描こうとしたのだろうか。

その問題を考えるための手掛かりとして、ここできとり

あげたいのが、藤田省三氏の「松に聴け—現代文明へのレクイエム」である。この文章は、昭和三十八年（一九六三）の乗鞍岳自動車道路の「開発」によって犠牲になつて枯れた「ハイマツ」を調査観察した信濃教育会に所属する名取陽・松田行雄の両氏の調査を紹介したうえで、その調査の意味を、藤田氏が説明したものである。

こうして、人間の浅薄な「頭の良さ」がどんなものであるかが決定的な形で明らかにされた。岩山の斜面を百年にわたつて匍い続けて来た一つの樹木の生活様式とのコントラストにおいて。そうしてその対照軸となつたハイマツの実態を認識のレベルにまで高めたものは、人間の自己中心的な開発がもたらした「破壊」という危機の最中さなかにあつて、その犠牲いけにえをつぶさに見取るといふ、数少ない人の丹念な行為にほかならなかつた。危機は認識のチャンスであり、その危機における認識を支える精神的動機は犠牲者への愛であり、そうしてその認識行為だけが「浅ましい人間」からの脱出と回復を——すなわち蘇りと再生を可能にする第一歩にほかならないということ、これを、これ程如実に示す一例はそう多くはない。私も又その道を、残された僅かの年月の間、歩もうとする者の一人でありたい。此の土壇場の危機の時代においては犠牲への鎮魂歌は自らの耳に快適な歌としてではなく精魂込めた「他者の認識」として表れなければならない。その認識としてのレクイエムのみが辛うじて蘇生への鍵を包

蔵している、といふべきであらう。<sup>(23)</sup>

ここで藤田氏が言う土壇場の危機の時代における犠牲への鎮魂歌、他者の認識としてのレクイエムという考えを、「蕪城賦」に援用して考えることはできないだろうか。ただ記録者である名取氏や松田氏にとつての「松」が、人間にとつての他者であるという関係と、「蕪城賦」の書き手である鮑照と宮人との関係は同じではないだろう。鮑照と宮人は同じく周縁者であり、宮人には鮑照自身の姿が重ね合わされていると考えられる。そういう意味では、書き手である鮑照にとつての宮人は他者ではない。

「蕪城賦」以前の荒唐を描く文学は、班豹「北征賦」や王粲「七哀詩」のように、民の苦難に目を向け、それを描こうとする作品もあるが、その基本的な姿勢は、為政者や天命を中心として、それに翻弄される周縁者の悲哀を述べるといふものであつた。これに対して、「蕪城賦」はその周縁者の立場から、周縁者と中心との関係を描こうとする。このような為政者や天命という中心に対して、その他者として周縁者の立場から、その営為と思ひに眼を向けたのが、「蕪城賦」なのであらう。そうであれば、周縁者の営為と思ひをつぶさに描こうとする「蕪城賦」は、これまで十分には顧みられることのなかつた、中心に翻弄され、犠牲となつた周縁者に対するレクイエムと見ることができないだろうか。

そして、この周縁者の営為や思ひが喪失する過程をつ

ぶさに描き出すために選ばれた文体が、賦という文体だつたのではないか。当時、賦はその主流の座を詩に譲り、賦の制作はかつてほど盛んではなくなつていた。そのような状況において、「蕪城賦」が賦という文体を選択したのは、中心に翻弄され、中心の喪失とともに喪失する周縁者の営為と思ひをつぶさに描こうとした結果であつたと考えることはできないだろうか。

しかし、「蕪城賦」が書かれた時代において、賦という文体がどのような意味をもつていたのかということ、本稿では論じることができていない。ここでは、「蕪城賦」は、賦であるからつぶさに描かれたのではなく、周縁者の営為と思ひをつぶさに描きたかつたからこそ、賦という文体が選択されたと考えるべきではないかということ、を指摘するにとどめたい。

(付記) 本稿は、平成二十五年三月十六日に県立広島大学広島キャンパスで開催された「六朝文学術学会第二十六回例会」における発表をもとにまとめたものである。席上、ご意見ご教示いただいた先生方に改めて感謝申しあげます。

## 注

(1) 土屋聡氏「鮑照「蕪城賦」編年考」、『文学研究』一〇四・一〇〇七。

(2) 西川ゆみ氏「鮑照「蕪城賦」における廢墟」、『六朝文学術学会報』第十四集・二〇一二。

(3) 『詩経』王風「黍離」詩序「黍離、閔宗周也。周大夫行役至于宗周過故宗廟、宮室、屋廡、禾黍、閔周室之顛覆、彷徨不忍去、而作是詩也。」

(4) 宮中の荒廢するを描くことによって、国の滅亡を暗示し、君主の失敗を批判することは『史記』淮南厲王長伝「王坐東宮、召伍被与謀、曰、將軍上。被愾然曰、上寬赦大王、王復安得此亡国之語乎。臣聞子胥諫吳王、吳王不用、乃曰、臣今見麋鹿游姑蘇之台也。今臣亦見宮中生荆棘、露霑衣也。」

(5) 李善注に「故時會者、言此乃時君不能修德致之、故使傾覆、非天命無常也。時亦世也。言人吉凶乃時會之變化、豈天命無常乎」とある。

(6) 本文に引用した箇所直前には次のようにある。班彪「北征賦」「越安定以容与兮、遵長城之漫漫。劇蒙公之疲民兮、為邇秦乎築怨。舍高亥之切憂兮、事蚩狄之遺患。不耀德以綏遠、顧厚固而繕藩。首身分而不寤兮、猶效功而辭讐。何夫子之妄說兮、執云地脉而生殘。……從聖文之克讓兮、不勞師而幣加。惠父兄於南越兮、黜帝号於尉他。降几杖於藩國兮、折吳濞之逆邪。惟太宗之蕩蕩兮、豈曩秦之所凶。」

(7) 王粲「從軍詩五首」其五(『文選』卷二十七)「悠悠涉荒路、靡靡我心愁。四望無煙火、但見林与丘。城郭生榛棘、蹊径無所由。蠶漸寬广沢、陂池夾長流。日夕涼風發、翩翩漂吾舟。寒蟬在樹鳴、鸛鶴摩天遊。客子多悲傷、淚下不可收。朝入譙郡界、曠然消人憂。鷄鳴達四境、黍稷盈原隰。館宅充廩里、女士滿莊植。自非聖賢國、誰能享斯休。詩人美樂土、雖

客猶願留。」引用文中の波線部は荒廢を描く部分、傍線部は荒廢の原因又は荒廢から想起されることが示された部分を指す(以下同じ)。

(8) 王粲「七哀詩二首」其一「文選」卷二十三「西京乱無象、豺虎方遺患。復棄中国去、遠身適荆蛮。親戚对我悲、朋友相追攀。出門無所見、白骨蔽平原。路有飢婦人、抱子棄草間。顧聞号泣声、揮涕独不還。未知身死处、何能兩相完。驅馬棄之去、不忍聽此言。南登霸陵岸、迴首望長安。悟彼下泉人、喟然傷心肝。」

(9) 潘岳「西征賦」(『文選』卷十)「爾乃階長梁、登未央。汎太液、凌建章。綦馭姿而款駘盪、轡杓詣而轡承光。徘徊桂宮、惆悵柏梁。鸞雉施於台殿、狐兔窟於殿傍。何黍苗之離離、而余思之芒芒。洪鍾頓於殿廟、乘風麾而弗鼎。禁省鞞為茂草、金狄遷於灑川。懷夫蕭曹魏郗之相、辛李衛霍之將。銜使則蘇属國、震遠則張博望。……皆揚清風於上烈、垂令聞而巳。想珮声之遺響、若鏗鏘之在耳。當音鳳恭頌之任勢也、乃熏灼四方、震耀都鄙。而死之日、曾不得与夫十余公之徒隸齒。才難不其然乎。」

(10) 阮籍「大人先生傳」(『阮籍集校注』卷上)「秦破六國、并兼其地、夷滅諸侯、南面稱帝。姱盛色、崇靡麗、鑿南山以為闕、表東海以為門。關万室而不絕、罔無窮而永存。美宮室而盛帷幃、擊鍾鼓而揚其章。広苑囿而深池沼、興渭北而建咸陽。麋木曾未及成林、而荆棘已繁乎阿房。時代存而迭处、故先得而後亡。山東之徒虜、遂起而王天下。由此視之、窮達詎可知耶。」

(11) 左思「魏都賦」(『文選』卷六)「于時運距陽九、漢網絕維。姦回内最備、兵纒紫微。翼翼京室、眈眈帝宇。巢焚原燎、變為煨燼。故荆棘於庭也、股股殿内、纒纒八區。鋒鋸統橫、化為戰場。故麋鹿寓城也、伊洛榛曠、嶺函荒蕪。臨甯半落、鄠郢丘墟。」

(12) 顔延之「北使洛」(『文選』卷二十七)「……前登陽城路、日夕望三川。在昔轅期運、始結闡聖賢。伊穀絕津濟、台館無尺椽。宮階多巢穴、城隄生雲煙……。」

(13) 顔延之「還至梁城作」(『文選』卷二十七)「……息徒顧將夕、極望梁陳分。故国多喬木、空城凝寒雲。丘壘填郢郭、銘志滅無文。木石局幽闕、黍苗延高墳。惟彼雍門子、吁嗟孟嘗君。愚賤同埋滅、尊貴誰獨聞。曷為久遊客、憂念坐自殷。」

(14) 『春秋』昭公二十年「左傳」「公曰、古而無死、其業若何。晏子對曰、古而無死、則古之業也、君何得焉。昔爽鳩氏始居此地、季荊因之、有逢伯陵因之、蒲姑氏因之、而後大公因之。古若無死、爽鳩氏之業、非君所願也。」

(15) 『毛詩』唐風「山有樞」詩序「刺晋昭公也。不能脩道、以正其国、有財不能用、有鍾鼓不能以自樂、有朝廷不能洒埽政荒。民散將以危亡、四鄰謀取其国家而不知。国人作詩以刺之也。」

(16) 『孟子』公孫丑下に「孟子曰、天時不如地利、地利不如人和」とあり、趙岐注に「天時、謂時日・支干・五行・旺相・孤虚之属也。地利、險阻城池之固也。人和、得民心之所和樂也」とある。ここで「天時」は天の定める時運、「地利」は險固な地勢や城壕、「人和」は民心が和らぎ樂しむ状態にあ



ることを言う。

(17) 「蕪城賦」以前の都市の荒廢を描く文学から、城内の荒廢を描く表現を抜き出すと、以下のようである。なお、同一表現には同種の傍線を附して示す。

班昭「東征賦」「曙瀟城之丘墟兮、生荆棘之榛榛。」

王粲「從軍詩五首」其五「城郭生榛棘、蹊徑無所由。」

潘岳「西征賦」「鷲雉雖於台陂、狐兔窟於殿傍。何黍苗之黜黜、而余思之芒芒。洪鍾頓於毀廟、乘風靡而弗甦。禁省鞠為茂草、金狄遷於瀟川。」

『桓譚新論』「高台既已傾、曲池又已平、墳墓生荆棘、狐狸穴其中。」

阮籍「大人先生傳」「蘿木曾未及成林、而荆棘已繁乎阿房。」  
左思「魏都賦」「巢焚原燎、變為煨燼、故荆棘旅庭也。殷殷襄內、繩繩八區、鋒鏑縱橫、化為戰場、故麋鹿驚城也。伊洛榛曠、峭函荒蕪。臨留牢落、駟郢丘墟。」

陸機「門有車馬客行」「市朝互遷易、城闕或丘荒。墳壠日月多、松柏鬱芒芒。」

顏延之「北使洛」「伊穀絕津濟、台館無尺椽。宮陛多巢穴、城闕生雲煙。」

顏延之「還至梁城作」「丘壘填郭郭、銘志滅無文。木石崩幽

蘭、黍苗延高墳。」

(18) 班彪「北征賦」「攬余涕以於邑兮、哀生民之多故。」  
(19) 班昭「東征賦」「惕覺寤而顧問兮、想子路之威神。」  
(20) 王粲「七哀詩二首」其一「南登霸陵岸、迴首望長安。」  
(21) 潘岳「西征賦」「懷夫蕭曹魏邴之相、辛李衛霍之將。衛使

則蘇厲國、震遠則張博望。教敷而彝倫絀、兵爭而皇威暢。臨危而智勇奮、投命而高節亮。暨乎稔侯之忠孝淳深、陸賈之優游宴喜。長卿淵雲之文、子長政駿之史。趙張三王之尹京、定國積之之聽理。汲長孺之正直、鄭當時之推士。終童山東之英妙、賈生洛陽之才子。」

(22) 塚本信也氏「鮑照の樂府について 周緣者の悲哀」(『集刊東洋学』七一・一九九四)は、任意の「雅」を中心に、差異化されたそれ以外の「俗」が周緣部として圍繞する構図が、鮑照の作品世界を解釈する上で有効であることを指摘する。稿者のここでの結論は、この塚本論文の指摘によるところが大きい。

(23) 藤田省三氏『戦後精神の経験Ⅰ』(影書房・一九八二)。引用は『藤田省三著作集七 戦後精神の経験Ⅰ』(みすず書房・一九九八・B・5頁)による。

(24) 小南一郎氏「旅する鮑照」(『桃の会論集』第四集鮑照專号・二〇〇八)は、鮑照の作品の背後にはつねに運命への強い関心があり、この「蕪城賦」も、城と滅亡を共にした人々の運命への強い関心があること、そして賦作を通して、鮑照は人々の運命を支配する不条理を、確認したことを指摘する。